

『巖島宝前和歌』『巖島社奉納和歌』校注

巖島社宝前和歌

〔夏日陪巖島宝前、詠水石歴幾年和歌〕

権中納言藤原雅教

01

宮居守る浪も難波の玉堅磐あら著く千世の夏や数ん

新大夫国忠

02

靡きあふ神の恵も石が根に幾千世涼し影を見すらん

左近大夫源元綱

03

水上の流は細れ石の竹の代の久しさの根差しとぞなる

従四位下源正久

04

掻き分けて岩根岩が根行水も尽きぬ流の千世や経るらむ

従四位下佐伯親尊

05

幾年を經る五月雨の雲のうちに落滝つ瀬の石走る水

左近衛丞源綱長

06

来る年も変らぬ神の宮居とて岩根に古き池の玉水

左近将監佐伯景慶

07

山深き影を汀の岩根松猶幾年の世にか逢なん

民部丞佐伯造泰

08

行水の流れに見ゆる細れ石の巖とならむ松の下影

竹松丸

09

涼くも水の細れを数に取り数へむ千世は尽じとぞ思ふ

権大僧都良勢

10

年を經る甲斐社あらめ細れ石の岩の雫の淵となるまで

権大僧都慶遍

11

峰の松幾年か経し山水の石間の流れ影は涼しも

権大僧都看銀

12

幾代経し心はまさに顯れて水や巖の池に見すらん

権少僧都良秀

13

動きなき山の岩根を行水に松の千歳の影を移して

権少僧都良増

14

作りなす庭の石間の細れ水常磐堅磐に幾年か経し

按に、此和歌何の故ありて、奉納ありしや、其所伝を失ふ、
頃は永祿年中なるべし。

石川

一

巖島社奉納和歌

「豊臣関白参詣、興行和歌三十六首」

松 秀吉公

15 聞きしより眺めに飽かぬ巖島見せばやと思ふ雲の上人

義近朝臣

16 言の葉も及ばぬ春の海山を君が眺めとなして置らん

信長朝臣

17 亀の尾の岩根の花を根差しにて千代も採まなん滝の白糸

頼隆朝臣

18 絵にもやは筆も及ばじ官島の浦と山との春の景色を

秀康朝臣

19 思ひきや此島山により来つゝ散り残りたる花を見んとは

瑤甫

20 立ちしより恵も深き山桜花もや君が代を仰ぐらん

堯瀨

21 山々の霞の隙に散りてくる花かあらぬか見ゆる白波

法印定加

22 音に聞く此島山を来てみれば宮居名高き春の海面

僧全宗

23 語るともえやは尽くさむ中々に此島山の春の景色を

法眼瑞慶

24 都にて聞きしは物の数ならぬ此浦山の春の景色は

禪高

25 暮るゝともいかで帰らん島山の眺めに飽かぬ春の海面

長吉

26 打霞むこの島山の桜花眺めに飽かぬ春の海面

盛月

27 名も高き浦の宮居に来てみれば眺めに残る山桜かな

忠重

28 浦山の眺め殊なる春の日に長長しくも落る滝波

正房

29 名に愛でてこの島山に来て見れば霞に落る滝の白糸

賢家

30 神代より契りし松の藤波は下行水もえやは絶えまじ

勝隆

31 音に聞くこの宮島を眺むればなほ面白き春の海山

長盛

32 行く舟も君が御幸の折をえて波も静けき春の宮島

三成

33 春ごとの頃しも絶えぬ山桜蓬が島の心地社すれ

勝利

34 見渡せば花咲きにけり明ぼのや霞に浮かぶ興津島山

宗澄

35 折にあひて咲くや桜の花盛り色も心も深き島山

吉種

36 花の頃君が御幸の折を得て此島山の名社高けれ

37 都人に眺められつ、島山の春の色香も名こそ高けれ
吉繼

38 名に聞し宮島山の桜花眺めも深き春の夕暮
相阿

太坊

39 名も高き宮居はるかに来て見れば霞の末の滾つ白波

休夢

40 聞しより見てこそ増され島山の霞に続く船の数数

新榮

41 いつの春種を植けん島山や松は苔むす岩はなるらん

国重

42 滝津瀬の花に心を打ち解けて帰るさ惜しき波の早船

正家

43 宮島の春の景色に君が代の風吹かぬとや花も知らん

正勝

44 浦山をかけても澄める宮居かな眺妙なる春の夕暮

元長

45 宮島の春や御幸を待つらん今日一入の花の色香は

道茂

46 花の春安芸の島山来て見ればなほ一入の月の夕暮

友阿

47 豊かなる君が千歳に生れきて今日宮島の花を社見れ

祐庵

48 遅桜心ありてや残らん雲の上なる人待ちつ、

久阿

49 春風に流る、滝の末澄みて神の宮居のなほも絶えまじ

元清

50 時をえて神の井垣に咲花の恵みの露の掛かる長閑けさ

按に、

こは太閤西征の時、この島の座主水精寺にて、興行ありしなるべし、寺に此短尺を蔵せり。

〈校注〉

01 ○宮居：神が鎮座すること。また、その場所。神社。○玉

堅磐：水底の堅い岩。「玉」は美称。「難波江の藻に埋もる

玉がしは頭はれてだに人を恋ひばや」（千載・恋六四一 源

俊頼）○あら著く：「あら」は感動詞。はつきりと。明白

に。○千世の夏：末永く千年もと祝う夏。端作に「夏日陪嚴

島宝前」。

02 ○靡きあふ：皆で心を寄せる。「くあふ」は一緒にくするの

意。○恵：恩恵。○石が根：大地に根を下ろしたような岩。

「岩が根」とも。○幾千世：いつたいどれほど長い時間を。「逢

ひ見ても猶慰まぬ心かな幾千世寝てか恋のさむべき」（拾遺・

恋七二六 紀貫之）○見す：見せる。

03 参考「わが君は千代に八千代に細れ石の巖となりて苔のむすま

で」（古今・賀三四三 読人不知）○細れ石：小さい石。○

竹の代：「代」に「節（よ）」を掛け、竹の節と節の間。○

根差し…植物が地中に根を下ろすこと。

04 ○岩根…「岩が根」に同じ。 ○行水…流れてゆく水。「尽きぬ」に掛かる。「吉野川岩波高く行水の早くぞ人を思ひそめてき」(古今・恋四七一 紀貫之)

05 ○五月雨…陰曆五月頃の長雨。梅雨。 ○落漕…高い所から低い所へ流れ落ちて、水勢が激する。「落ち漕つ滝の水神年積もり老いにけらしな黒き筋なし」(古今・雑九二八 壬生忠岑) ○石走る…水が岩に激しくぶつかって、跳ねる。

06 ○官居…神が鎮座すること。また、その場所。神社。 ○岩根…大地に根を下ろしたような岩。「岩が根」とも。 ○玉水…清水。「玉水の たきつの宮こ 見れど飽かぬかも」(拾遺・雑五六九 柿本人麿)

07 ○汀…水際。 ○岩根松…岩根に生える松。「岩根の松」とも。色の変わらないこと、めでたいことの喩え。「風に散る紅葉は かるし春の色を岩根の松にかけてこそ見め」(源氏物語・少女・三三七)

08 参考「わが君は千代に八千代に細れ石の巖となりて苔のむすまで」(古今・賀三四三 読人不知) ○行水…流れてゆく水。 ○細れ石…小さい石。 ○巖…大地から突き出た岩。また、大きな岩。

09 ○細れ…名詞に冠して、小さいの意を表す。「尽きじ」に掛かる。 ○数に取り…ものなどを数える時に、しるしとなるものを心覚えに取る。 ○尽きじ…千世も尽きることのない。「君

が代は尽きじとぞ思ふ神風や御裳濯川の澄まむ限りは」(後拾遺・賀四五〇 源経信)

10 参考「わが君は千代に八千代に細れ石の巖となりて苔のむすまで」(古今・賀三四三 読人不知) ○甲斐こそあらめ…価値があることだろう。 ○細れ石…小さい石。 ○岩の雫…岩の上

に落ちる雫。 ○淵…流れがよどんで深くなっている所。「瀬」の対。▽岩の雫が溜まり、淵となるという喩え。

11 ○石間…岩と岩との間。「春霞立つや遅きと山河の岩間をくぐる音聞こゆなり」(後拾遺・春二三 和泉式部) ○影…山水に映る松の影。 ○涼しも…「も」は感動・詠嘆の意を表す上代語。

12 ○顕れて…(心が)表面に出る。露わになる。 ○巖…大地から突き出た岩。また、大きな岩。 ○見す…見せる。

13 ○岩根…大地に根を下ろしたような岩。「岩が根」とも。 ○行水…流れてゆく水。 ○松の千歳…松の寿命が長いこと。「松の千代」とも。「音にのみ聞き渡りつる住吉の松の千歳を今日 見つるかな」(拾遺・雑四五六 紀貫之)

14 参考「作りなす庭の山路の菊の露あかず千歳の安芸を契らん」(称名集七四四) ○作りなす…のさまに作り上げる。 ○石間…岩と岩との間。「春霞立つや遅きと山河の岩間をくぐる音聞こゆなり」(後拾遺・春二三 和泉式部) ○細れ水…さらさらと流れる浅い水。 ○堅磐…堅固な岩。永久に変わらないことを祝つていう語。「山階の山の岩根に松を植えて常磐堅磐に 祈りつるかな」(拾遺・賀二七三 平兼盛)

- 15 ○眺めに飽かぬ…眺めには飽きることのない。○見せばや…「ばや」は願望を表す終助詞。○雲の上人…宮中に仕える人。狭義には殿上人。
- 16 ○言の葉も及ばぬ…言葉では表すことが出来ない。「敷島や大和島根の言の葉も及ばぬほどの山桜かな」(如願法師集一五九) ○君が眺め…尊いあなたが眺めるもの。○なして…ということにして。
- 17 ○亀の尾…亀の尾の形状に似ていることと共に、縁起物の「亀」を配することで、「千代」と組み合わせた。○岩根…大地に根を下ろしたような岩。「岩が根」とも。○根差し…植物が地中に根を下ろすこと。○揉まん…手を擦り合わせて激しく祈禱する。「なむ」はきつと…するであろうの意。○瀧の白糸…瀧の落ちるさまを糸に見立てたもの。
- 18 ○絵にもやは…「やは」は反語の意。…か、いやそうではない。○筆も及ばじ…筆を用いて書くことも及ばない。○宮島…厳島の後世の通称。厳島明神がある。「はるばると風たる朝の岩が根に松とはしるし宮島の神」(玄玉集・神祇・一四 藤原実定)
- 19 ○思ひきや…思いもしなかった。漢語訓読的表現。「思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たき漁りせむとは」(古今・雑九六一 小野篁)
- 20 ○立ちしより…(桜の)木が立ってから。○恵…恩恵。○花もや…花までもが。○君が代を仰ぐ…君が代を厚く敬う。
- 21 「君が代にあぶくま河の底清み千歳を経つつ澄まむとぞ思ふ」(詞花・賀一六一 藤原道長)
- 22 ○霞の隙…霞の切れ目。「深緑色殊なりや朝まだき霞の隙に見ゆる大空」(和歌童蒙抄・第一・一) ○花かあらぬか…花なのか、そうではないのか。「秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬか浪の寄するか」(古今・秋二七二 菅原道真) ○白波…「花」の見立て表現。「白浪の音せで立つと見えつるは卯の花咲ける垣根なりけり」(後拾遺・夏一七二 読人不知)
- 23 ○音に聞く…評判の高い。○宮居…神が鎮座すること。また、その場所。神社。○海面…海のほとり。海辺。
- 24 ○えやは…どうして…できようか。「今はとて秋果てられし身なれども霧立ち人をえやは忘るる」(後撰・秋一三〇〇 読人不知) ○尽くさむ…初句「語るとも」を承け、語り尽くすことが出来ようか。○中々に…却って。なまじつか。
- 25 ○物の数…それと数え立てるほどのもの。多く打ち消しの語を伴って。「物の数にも あらぬ身を ただひとへとて あさましく」(多武峰少将物語・四七)
- 26 ○暮るゝとも…たとえ日が暮れたとしても。○いかで…どうにかして。○眺めに飽かぬ…眺めには飽きることのない。○海面…海面…海のほとり。海辺。
- 27 ○打霞む…「打(ち)」は接頭語で、動詞に冠して意味を強める。○眺めに飽かぬ…眺めには飽きることのない。○海面…海のほとり。海辺。

27 ○名も高き…名声の高い。○浦の宮居…浦の中に立てる神社。巖島神社のさま。○眺めに残る…眺めると、それが残像として残る。

28 ○殊なる…他と違って素晴らしい。「千代ふべきはじめの春と知り顔に景色ことなる花桜かな」(千載・賀六二三 藤原経宗) ○長長しく…「長」を重ねて強調した語。とても長く。○滝波…落下する滝の水。「岩にかけ川瀬に音や余らん雨さへ添ひてふるの滝波」(為尹千首・雑二百首・八三四)

29 ○名に愛でて…名声に心惹かれて。「名に愛でて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」(古今・秋二二六 遍昭) ○霞に落ちる…霞でその形状は見えないが、滝が落ちる音の聞こえるので、かく言う。「暮れてゆく春の湊は知らねども霞に落ちる宇治の柴舟」(新古今・春一六九 寂蓮) ○滝の白糸…滝の落ちるさまを糸に見立てたもの。

30 ○神代より…神々の時代以来。○契りし…約束を交わした。○松の藤波…皇室をさす「松」に掛かる「藤波」は藤原氏をさす。いわゆる、天照大神と藤原氏の祖神天兒屋根命との間で交わされた「二神約諾事」を示す。「水底の色さへ深き松が枝に千歳をかねて咲ける藤波」(後撰・春二二四 読人不知) ○音に聞く…評判の高い。○宮島…巖島の後世の通称。巖島明神がある。「はるばると風たる朝の岩が根に松とはしるし宮島の神」(玄玉集・神祇・一四 藤原実定)

32 ○御幸…当初は天皇の「行幸」と区別して、上皇・法皇・女院

には「御幸」を宛てた。時代が下ると、撰関にも使う。ここでは関白秀吉をさす。○折を得て…機会を得て。「山里の柳桜も折を得て都のみやは錦なりける」(守覚法親王集二九) ○宮島…巖島の後世の通称。巖島明神がある。

33 ○頃しも…「しも」は特立強調する語。ちょうどその頃。「花薄穂に出でて招く比しもぞ過行く秋は止まらざりける」(堀河百首・薄・六二六 大江匡房) ○蓬が島…「蓬萊山」に同じ。中国の伝説上の山。東方の海中にあり、不老不死の仙人が住む理想郷とされる山。「まことにや蓬が島に通ふらん鶴に乗るてふ人に問はばや」(堀河百首・鶴・一三五六 永縁) ○心地こそすれ…「こそ」は強調。気持ちがある。「神奈備の三室の山を秋行けば錦断ち切る心地こそすれ」(古今・秋二九六 壬生忠岑)

34 ○見渡せば…はるかに見渡すと。「見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりける」(古今・春五六 素性) ○霞に浮かぶ…霞に浮かんでいるように見える。「難波濁潮路はるかに見渡せば霞に浮かぶ沖の釣舟」(千載・雑一〇四九 円玄) ○興津島山…海上遠くにある島の山。

35 参考「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」(古今・仮名序) ○折にあひて…機会があつて。○咲くや桜の花盛り…こんなにも桜が咲いているよ。○色も心も…色彩もそれを解する風流心も。「風霜に色も心も変らねば主に似たる植木なりけり」(後撰・雑一二二九 真延)

36 ○君が御幸…関白秀吉の厳島来訪のこと。 ○折を得て…折を得て…機会を得て。「山里の柳桜も折を得て都のみやは錦なりける」(守覚法親王集二九)

37 ○都人…都に住んでいる人。また、風雅な人。 ○色香…色と香。「よそにのみあはれとぞ見し梅花飽かぬ色香は折りてなりけり」(古今・春三七 素性) ○名…評判。

38 ○名に聞きし…評判を聞いた。 ○宮島…厳島の後世の通称。厳島明神がある。 ○眺めも深き…夕暮の時間なので、その眺めを「深き」と言う。「枝高く眺めも深き青柳の風に問はれて心乱せり」(桜井基佐集一一)

39 ○名も高き…名声の高い。 ○宮居…神が鎮座すること。また、その場所。神社。 ○霞の末…霞のずっと向こうの先。「眺めやる霞の末の白雲のたなびく山の曙の空」(式子内親王集二〇七) ○滾つ…水が激しく流れる。「年のはにかくも見てしかみ吉野の清き河内の滾つ白浪」(万葉・巻六・九一三 笠金村)

40 ○見てこそ増され…見ることによって船の数が増すよ。 ○霞に続く…霞に隠れていた船の数が陸続と増してくるので、かく言う。

41 ○いつく種を植けん…いつ頃に種を植えたのだろうか。「久方の月の桂はいかにしてかかる光の種を植えけむ」(壬二集二四四七) ○苔むす…苔が生える。転じて、古めかしくなる。「松も生ひまたも苔むす石清水行く末遠く仕へまつらん」(続古今・神祇七〇二 紀貫之)

42 ○滾津瀬…沸き返り流れる激流。激しく流れる瀬。「滾つ瀬の中にもよどはありてふをなど我が恋の淵瀬ともなき」(古今・恋四九三 読人不知) ○打ち解けて…隔てなく親しんで。 ○帰るさ…帰りしな。帰り時。 ○早船…船足の速い船。

43 ○宮島…厳島の後世の通称。厳島明神がある。 ○風…「風」の訓読。風儀。「山桜あくまで今日は見つるかな花散るべくも風吹かぬ世に」(兼盛集四)

44 ○宮居…厳島の後世の通称。厳島明神がある。 ○妙なる…不思議なまでに優れている。霊妙だ。

45 ○宮島…厳島の後世の通称。厳島明神がある。 ○御幸…当初は天皇の「行幸」と区別して、上皇・法皇・女院には「御幸」を宛てた。時代が下ると、撰関にも使う。ここでは関白秀吉の厳島来訪をさす。 ○一入…一段と。ひときわ。「常磐なる松の緑の春来れば今一入の色まさりけり」(古今・春二四 源宗子)

46 ○安芸…「秋」を掛け、初句の「春」と対を表す。 ○一入…一段と。ひときわ。「常磐なる松の緑の春来れば今一入の色まさりけり」(古今・春二四 源宗子)

47 ○君が千歳…君の代が千歳も続くようにと折る。 ○宮島…厳島の後世の通称。厳島明神がある。

48 ○遅桜…遅咲きの桜。季節に遅れて咲く桜。 ○心ありて…感応する心があつて。「心ありて鳴きもしつるかひぐらしのいづれも物の飽きて憂ければ」(後撰・秋二五六 紀貫之) ○雲の

上人。ここでは関白秀吉をさす。

49 ○滝の末…滝の流れの行き着く果て。 ○神の宮居…神が鎮座すること。また、その場所。神社。 ○絶えまじ…絶えることがあるまい。

50 ○時を得て…機会を得て。 ○井垣…鳥居などに作りつけた井の字形の垣。「見ても飽かぬ大宮人も手折れとや神の井垣を植ゆる卯花」(草根集二〇六四) ○恵み…恩恵。 ○掛かる…「露」の縁語。 ○長閑けさ…おだやかさ。

〔解題〕

巖島社宝前和歌(テキストは『芸藩通志』巻二十七に拠る)

「権中納言雅教」以下、十四名の各一首。在地の武士・祠官・僧侶と共に奉納か。権中納言雅教は飛鳥井雅教(永正十七年1520)文祿三年1594、七五歳)。前権大納言雅綱卿男。母は故正三位丹波親康卿女。天正十年1582六三歳の時、雅春と改める。法名了雅。「永祿二年正月から天正三年二月まで」権中納言、その間のものである。永祿四年「左衛門督。月日辞督。六月日在國」、永祿十一年「在國。月日上洛」などあるから、永祿十一年後半の上洛途次のものか。また、豊臣秀吉の歌道師範を務めた。

参考文献…井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』(明治書院・

昭47)

巖島社奉納和歌(テキストは『芸藩通志』巻二十七に拠る)

天正十五年1587三月十八日(豊公歌集によると廿日)、豊臣秀吉が九州出陣の途中、巖島社に参詣し、山名禪高・斯波義近ら供の人たちと各一首を奉納した。全三六首。芸藩通志・豊公歌集に翻刻がある他、『先代御便覧 廿五』・高松宮に写本が存する。

以下、高松宮本(H-600-303、4函88)・国文学研究資料館(C393)の書誌を示す。外題は「巖島社奉納和哥」、内題は「秋日陪 巖島明神宝前同詠三十三首和歌付小序/少納言季長」。原表紙には「巖島社奉納和哥正応五年 井秀吉公奉納等」とある。江戸前期写。袋綴じ。縦二九・二cm×横二〇・九cm。表紙は本文共紙(原)、内曇(後補)。丁数は全七丁。前半は「正応五年巖島社頭和歌」、五丁才より「秀吉公奉納短冊三十六首」(但し、内題ナシ)。当該書は後半にあたる。奥書は次の通り。

(正応五年巖島社頭和歌) 次二提婆品書写/奥書/依散位藤原親範願書之/正応五年八月十日藤原朝臣経名/右本紙巻物哥三行宛二書之

(秀吉公奉納短冊三十六首) 右秀吉公奉納三十六首/短冊也/右安芸宮嶋より写来底深置□(守カ) /俄令書写重而可令清書加一校了

参考文献…井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』(明治書院・

昭47)

Abstract

Annotation to Two Different Waka Poems Dedicated to
Itsukushima Shrine <巖島宝前和歌> and <巖島社奉納和歌>.

Hajime ISHIKAWA

I annotate two different waka poems dedicated to Itsukushima Shrine. The first one is the poems written supposedly in 1568 by fourteen people including one aristocrat, Masanori Asukai. This waka poem was dedicated to Itsukushima Shrine on his way to Kyoto. The second one is the poem written by thirty-six people including the Ex-Prime Minister Hideyoshi Toyotomi. It was dedicated to the shrine on their way to the Kyushu Front in March, 1587.